

2022. 3. 3 CSTI教育・人材育成WG 戸田市教委 戸ヶ崎 勤

p. 24についてです。教師による一斉授業と子供主体の学び、TeachingとCoachingなど両者を対立や単なる移行と解釈しないなどの配慮から、ハイブリッド化、グラデーション化したことに関しての賛同と意見です。

最近、学校訪問で授業を見ていると、指導すべきことをきちんと指導しなかったり、指導をためらったりする若手教師が目につきます。この資料においても、「指導」という単語は、指導要領、指導体制などという用語の中と、特定分野に特異な才能のある児童生徒の中での「指導・支援」、そして、p29に「させない、触れさせない指導の情報モラル教育」とよくないイメージで使用されているだけです。一方、「支援」はたくさん登場しています。

近年、「指導」という単語は、教師の願いや価値観などを児童生徒に「押し付けている」というイメージで捉えられているようです。ある研究会で「教師は指導者ではなく伴走者なので指導や指示をしてはいけない」という発言までありました。指導＝強制ではありませんし、支援をする指導もあります。

かつて、平成元年改訂の学習指導要領において、いわゆる「新しい学力観」が打ち出され、個性を生かす教育が強調されました。当時はさかんに、「今後は指導ではなく支援だ」と流布され、学校現場には指導することを躊躇する風潮が広がりました。学習指導案は学習支援案へ、机間巡視は机間指導そして机間支援などと置き換えるべき、という「指導」もありました。中には、先程の研究会と同じように、「教師は教えるてはいけない」という発言も度々聞かれました。そうした流れの中で、本来指導すべきことがきちんと指導されなくなり、子供の学力等を危惧する声が広がってきました。そして、前回も申し上げましたが、平成8年の中教審答申では、ホワイトヘッドの「教えるべきことは徹底的に教えるべし」という言葉が度々引用されるなどして、「支援」の用語は徐々に影が薄くなり、いわゆる揺り戻しが行われました。

子供の主体性の尊重と教師の指導性の発揮は、指導と評価の関係と同様に表裏一体であり、教師の確かな指導力と適切な生徒理解に基づいて判断されるべきだと思いません。そこに教師の指導観が異なる要因も生じます。自己学習力が付いていないと判断するときは、丁寧に指導しなければなりません。力を付けてくれば支援に徹することもできます。実態を踏まえない指導や支援は、子供の学びを妨げたり放置してしまうことにもなりかねません。

日本の教育は、「ゆとりと詰め込み」「一斉と個別」「履修と修得」など二項対立の狭間で揺れてきました。それぞれのよさを生かすというのが常に課題でした。今も昔も、古いことや近いことは否定されがちで、新しいことや外の世界にユートピアを見出す傾向があります。p. 24のハイブリッド化、グラデーション化が深く意味することについて、学校教育関係者はもちろんのこと、保護者や広く国民の理解を得られるように進めていくべきだと思います。